

「働く派でがんばる」2 ケーススタディ

まだまだ仕事から離れるのはもったいない

七十歳まで働きたいから

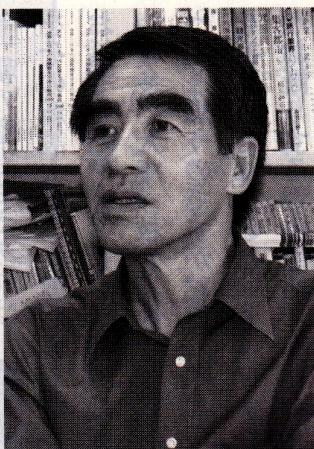
四十代後半から、人生後半の生き方を

模索し始めたという鈴木勝さん。悠々自適で暮らせる道を
あえて選ばず、進んだ道は大学教授でした。

大学教授に転進した
知人がうらやましかつた

大阪明淨大学教授の鈴木勝さん（六十歳）は、サラリーマン生活のまま六十歳で定年、そして現役引退という道を良しとせず、五十五歳で大学教授に転身しました。現役バリバリの先輩たちが定年を迎えた瞬間、職を奪われる姿を見続け、自分は違う道を行きたいと、第二の人生を模索し始めたのは四十代後半の頃だ。

「海外生活が長く、日本に戻ってきても働けます。それでも六十二、三歳ごろには『お役御免』となってしまいます。せめて七十歳くらいまでは、第一線で働き続



観光のプロを養成する鈴木さんの講義は学生からの人気が高い

けたいと考え、そのための準備を始めました」（鈴木さん）

鈴木さんは早稲田大学卒業後、日本交通公社（現JTB）に就職。アジア太平洋地域のパッケージ旅行を企画し商品化する部署に配属された。

「JTB本社内にある部署で百人程度の部員がいたのですが、組織が大きくなれば、大企業病というか、一つの決裁を

取るにもたくさん上司の承認が必要で、一刻を争う仕事なのに進まない。そこで、業務効率化のために分社化政策がとられ、旅行企画専門の会社を設立しました。そこに私も移ったのです」

会社名はJTBワールドという。後年、豪華部長となり、オーストラリアや

中国の駐在約十年間の経験を生かし、さまざまな海外パッケージツアーや企画のリーダーシップをとった。

「大学教授という職業が頭の中に浮かんできたのは北京駐在時代でしたね。現地で日本企業の駐在員の勉強会があり、そこには日経や毎日、時事通信などマスコミの記者もいました。彼らのうちの何人かは帰国すると、北大や東洋大などに大学教授として転職したのです」

新聞記者が大学教授になるのはよくあることだ。大新聞のブランドは大学としても見捨ててはおけない。

「そんな彼らを正直うらやましく思いましたが、私は観光・旅行に関する専門知識はあるものの、それはビジネス上のものでアカデミックではない。ですからまず無理だろうと思つていました」しかし、あきらめたわけではない。

取材・文 和田圭三

2005年2月にゼミの生徒たちと出かけた
オーストラリア研修旅行



鈴木さんは意欲的にその道を模索し始めた。その一つは観光関連の著作を認めることであり、また一つは、大学教授や専門家が集う学術団体（学会）に参加することだ。

部長・取締役としての多忙なサラリーマン生活の合間に縫つて、退職までに

「勤務中には書籍を出版した。三冊の書籍を出版した。

「執筆の時間は

「勤務中には書けませ

んから、執筆の時間は

いろいろとやりくりしました。まず、早

朝や昼休みの喫茶店。日曜日の山手線の

車内。そして、海外出張時の飛行機の中。

少しだけ自分でやりくりできる時間で

原稿書きに没頭しました。山手線ではい

つも一周していました。とても集中でき

る「時間でした」

「人伝に聞いた話では私の採用理由は、

①旅行・観光業での経験と知識、海外駐

在の豊富さ、②アジア太平洋地域のプロ

フェッショナル、③学術書はないが出版

書籍が三點ある、というものだそうです

鈴木さんは意欲的にその道を模索し始めた。その一つは観光関連の著作を認めることであり、また一つは、大学教授や専門家が集う学術団体（学会）に参加することだ。

部長・取締役としての多忙なサ

ラリーマン生活の合間に縫つて、退職までに

「勤務中には書籍を出版した。三冊の書籍を出版した。

「執筆の時間は

「勤務中には書けませ

んから、執筆の時間は

いろいろとやりくりしました。まず、早

朝や昼休みの喫茶店。日曜日の山手線の

車内。そして、海外出張時の飛行機の中。

少しだけ自分でやりくりできる時間で

原稿書きに没頭しました。山手線ではい

つも一周していました。とても集中でき

る「時間でした」

「人伝に聞いた話では私の採用理由は、

①旅行・観光業での経験と知識、海外駐

在の豊富さ、②アジア太平洋地域のプロ

フェッショナル、③学術書はないが出版

書籍が三點ある、というものだそうです

設大学設立の情報を得る。そして、その教授は鈴木さんに、「教鞭をとる意志はあるか」と尋ねてきた。鈴木さんにとって千に一つのチャンスである。しかし、ビジネス論や海外生活体験の著作はあるもののアカデミックなものは何もない。ビジネス上の専門知識だけでは通用しない世界である。

「私の意志さえあれば、その教授は私をその新設大学に推薦してくれるというお話をしました。JTBの経営陣にも知り合ったと思うのですが、その中、あえて私がお断りする理由がありません」

鈴木さんは履歴書に、書籍、雑誌記事、業界紙記事などを添え、大学に提出

した。その後、直ちに面接が行なわれ、その結果、助教授として採用が決まった。

二〇〇〇年三月、JTBを退職。翌四月に大阪明治大学に観光学部助教授として赴任した。

が、私はいちばん大きいのは信頼ある教授に知己を得たことだと考えています。やはり、人生で最も大切なのは出会い、人のつながりだと思います」
（光陽出版社）

「将来性の高いアジア太平洋地域での観光促進。教育を通じて、そのための仲間を増やすことが私の役割だと考えています」

「旅行企画論」「ビジネス概論」「アジア太平洋観光概論」などで、いずれもサラリーマン時代の体験を下に、鈴木さん自らが構築した旅行・観光論を機軸としている。

また、教鞭をとる傍ら、政府機関や海外交流団体の委員として、 ASEAN諸国や中国、極東ロシアなど観光産業が未

発達な国々への観光業促進の手助けを行なっている。

さらには、昨年度より名古屋外国语大学の講師も務めている。実家は埼玉県

にあり、現在は単身生活。実家に戻るのは月一回程度と忙しい。

最終的には 収支ゼロでいい

●鈴木さんの人生の歩み

- 22歳 日本交通公社入社
- 26歳 結婚(妻24歳)
- 27歳 長男誕生
- 28歳 次男誕生
- 29歳 三男誕生
- 36歳 シドニー駐在(~41歳)
- 42歳 出女作「オーストラリア学入門・コアラの国の法律あれこれ」出版
- 43歳 北京駐在(~47歳)
- 46歳 マンション購入(35年ローン)
- 49歳 「中国にうまく滞在する方法」出版
- 51歳 「中国人とうまくつきあう法」出版
- 55歳 JTB退職。大阪明浄大学助教授。「国際ツーリズム論」出版。退職金で住宅ローンを繰り上げ返済
- 56歳 大阪明浄大学教授
- 58歳 「55歳から大学教授になる法」出版
- 59歳 三男結婚
名古屋外国語大学講師



JTB時代、中国で開かれた会議にて(90年)

鈴木さんの一週間は概ね次のスケジューールで進む。

日曜日／午後、名古屋に移動

月曜日／名古屋外国語大学で講義。

帰阪

火曜日／大阪明浄大学で終日講義

水曜日／講義、午後教授会及び教務

木曜日／終日講義

金、土曜日／休日

大学は八、九月が夏休み。二、三月が春休み。この休みを利用して年六、七回は海外旅行に出かける。パッケージ旅

行を中心、現地の調査・取材なども含

まれる。

「転職後は週三日勤務で暮らそうと考え、それに沿ったカリキュラムを組んだ

が満たされなければ人生後半の生活基盤は揺らぐ。多くの定年世代の人たちはここがネックとなり、第二の人生へのジャンプアップをためらうのである。

「収入は減りました。六十歳までJTB

生活も長く、単身赴任も経験していますから、今の生活もお互いまったく苦にはなっていないと思いますよ」

では、収入はどうなのだろう。これ

が満たされなければ人生後半の生活基盤

は揺らぐ。多くの定年世代の人たちはこ

れが満たされなければ人生後半の生活基盤

は揺らぐ。多くの定年世代の人たちはこ

となつてきました。最初は毎週埼玉に帰つていたのですが、教務の仕事が増えたこと、とくに今は入試準備の季節でほとんど大阪での生活となっています」

ご家族は奥様とお子さんが三人。み

な、鈴木さんの第二の人生には理解を示してくれている。

「転職するときもそうでしたが、海外

旅行にも結構費用はかかりますが、子

どもたちに残すつもりはありませんし、

安定していますね。個人的に出かける海

外旅行にも結構費用はかかりますが、子

どもたちに残すつもりはありませんし、

Bで働いて、退職金と年金で悠々自適と

いうコースと同等というわけにはいきま

せん。しかし、サラリーマン時代は出費

も多く、收支バランス的には今のほうが

安定していますね。個人的に出かける海

外旅行にも結構費用はかかりますが、子

どもたちに残すつもりはありませんし、

安定していますね。個人的に出かける海